

授業や実習が遅くまである時は読書の場としての図書館は利用できないわけですし、一般教養図書のある中央図書館の本は読めないわけです。もう一つの理由としては、読書をする場におけるマナーが確立されていないため、足音が騒がしかったり、学生の休憩室と利用される傾向があって騒然とした雰囲気になることもあるためだと思います。

プリンストン大学にいたことのある生物学者によると、日本研究用の本だそうです、山岡荘八の「徳川家康」をその図書館から借りて読んだそうです。そこには中央公論、文芸春秋、週刊朝日、朝日ジャーナルまで揃っていたし、日曜日でも開館していたということです。

教養部 助手 川合 葉子

京都大学の総合的なライブラリーシステムというものがいま検討されているらしい。私達の生活にいろいろな影響がある事柄だけに、どういう内容なのか、具体的にはどういう影響があらわれてくるのか気がかりになる。「改革」ということは、主体となる人がどれほど善意を持って努力されても、まわりの事情とからみあって奇妙な効果をひきおこす危険性を持っている。中教審の答申でさえ「改革」という言葉が使われる世の中だから、何のために、何が変わるのかということに皆が神経質になっている。検討されている事柄をわかりやすく関係のある人々に知らせ、充分に意見が述べられる機会を設けて、慎重に検討してほしいと思う。「静脩」を読んでも、私達の知りたいことまでは書かれてないので、いろいろな疑問がかえって増えてくる。

利用者にとっては、開放的で利用しやすいシステムに変わるならば喜ばしいことである。コンピューターが導入されると、受入れの時日が短縮されたり、情報網が今までより整ったり、ある程度の利益を受けることになるのかなと思う。しかし機械を導入したからといって人のしなければならぬ作業量は減るとは限らない。むしろそのために新しい機能、新しい職務内容が生まれ、導入しただけの効果を挙げようと思えば、まわりの人々の作業量が増えるのが経験的な常識である。そのことを充分見通して職員定数についての計画も、もりこまれていると、やがてそのしわ寄せが利用者にはびいて来るのではないかと心配になる。

利用者の声を「改革」に際して特集されることは大変結構なことだと思う。ただ特集してから利用者の声は聞いたのだということになっては困る。もっと日常的に利用者の声が図書館行政に反映するようになってほしいと私は常々思っている。ふつう、私達の要望や疑問や不満はどういう形で図書館側に伝わるのだろうか。一番日常的には投書でもこのような寄稿でもなく、受入れや閲覧の業務をしている職員の人に折にふれて言うということが多い。私はいろいろな学部や教室の図書を利用させてもらった経験があるが、図書関係の職員の人々の仕事に対する熱心さに驚くことがよくある。学生の人達に教育的な助言ができるように勉強をしたり、教員や研究員の人達と図書委員会を構成していて、利用の実態や図書業務の専門的な見地からの意見を発言して、運営にいろいろ寄与をしておられる。でも多くの図書館では、職員の積極性を十分に引きだす機構になっていないように思う。今度の改革でも末端の職員はつنبさじきにおかれてはいないのだろうか。そうしておいて有能な職員がいないなどとは言うべきではないと思う。労働条件がととのい、職員の発言が尊重され、自信を持って働ける図書館では、私達も親切にいろいろ教えてもらえて、利用しやすい図書館になるのではないだろうか。

法学部 助手 広渡 清吾

文は人なりというが、また図書館は大学なりであろう。京大法学部は東大法学部に比して